茨城大学教職員組合

委員長日誌

第９号　０４／１０／１３

いま、こうしていられることの意味を考える

“Ｉ　Ｈａｖｅ　ａ　Ｄｒｅａｍ”

＜私には夢がある＞　リンカーン奴隷解放宣言から１００年，１９６３年８月，黒人解放にむけての２０万人のワシントン大行進。黒人解放運動指導者、マーティン・ルーサー・キング牧師の演説の一説である。活字で読むのもいいが、ＮＨＫのドキュメンタリーで聞いた演説の肉声は、力強く、心に残っている（いま、『感動する英語！』文藝春秋に掲載され、ＣＤがついている）。Ｌｅｔ　ｆｒｅｅｄｏｍ　ｒｉｎｇ・・・、自由の鐘を鳴り響かせよ！　ぜひ、一度耳にしてほしい。この演説の５年後、１９６８年、ケネディ暗殺と同様に、アメリカ政治史の汚点・暗部であるキング牧師暗殺事件が起きる。もし彼が生きていたら、いまのアメリカはないであろう。素人ながら、そう思う。

なぜ、こんなことを書き始めたのか。委員長日誌の前号は、理解していただけたかどうかわからないが、現状の大学を告発する、私にとっての一つの決断であった。この茨城大学での生き方を考えた。なぜあそこまで、私がこだわるのか、その訳をここでは書きたいと思う。

私にも、夢がある。この茨城大学に入学してよかった、と学生たちが思える大学にしたい！　ここに茨城大学があってよかった、と地域の人々が思える大学にしたい！　茨城大学ではそんなことをしているのか､と全国からの関心を呼ぶ大学にしたい！　人々に誇れる大学にしたい！　学生にとって学びがいのある、教員の研究が保障され、教員にとって教えがいのある、職員にとっては働きがいのある、そんな茨城大学をつくることが、私の夢である。

労働組合は、私利私欲を追及する組織ではない、我利我利亡者の組織ではない、と私は思っている。労働法の研究者だからと、労働者の権利と労働条件を守るためだけに、労働組合にかかわっているわけではない。少なくとも、私は、この茨城大学の未来のために、労働組合という立場から発言し行動しようとしている。労働組合は、私の夢を実現してくれるためのものと思っている。

もちろん、教員と職員は犠牲となるべきだなどとは思っていない。平和と、自由と、平等と、公正は、絶対に譲れない。戦争と差別は、絶対に許せない。しかし、それでは、確保された労働条件のなかで、私たち教員と職員は、なにを目的として働くのか。あたらしい大学の創造、教育と研究の創造のためではないのか。学生がどうなろうと、大学がどうなろうと、いまの平穏を、定年までの約束された「安定」を、崩さないでほしい。あと数年は静かにさせてほしい。そんな心情、一面では理解できるが、他面では理解できない。

私は、団塊の世代である。６０年代末から７０年代初頭にかけての学園紛争の世代である。私も、その歴史の流れの渦中にいた。私は、いま、こうして大学に職をえている。が、大学の自治と学問の自由に青春をかけて、その後の人生に多くの困難を抱え込み、最悪の場合は、生命を失った友もいる。だから、私は、この大学という場を、生活の糧をうる場とだけは考えない。考えてはいけないと思っている。この茨城大学の将来に夢をもつことは、友への責任であり、私自身が自分に課した歴史的な責任でもあると考えている。さらにまた、こうした私に、４０歳直前に、研究と教育の場を与えてくれた茨城大学への恩返しでもあると思っている。

そうであるから、大学の将来と、この茨城大学の将来のためにならないようなことは、許すことができない。内容なども考えずに、ただ文部科学省のマニュアルにしたがって、当面の問題を処理して、限られた茨城大学での生活時間をやり過ごそうとする人々とは、私は心を一つにすることはできない。

正直いって投げ出したくなるときもあるが､“Ｉ　ｈａｖｅ　ａ　ｄｒｅａｍ”と口ずさんで、明日からの現実生活に戻ることにしよう。閑話休題でした。

［２５年前を想いながら　０４／１０／１３］